

令和2年度 第1回 よこすか地域支え合い協議会 会議録

開催日時：令和2年（2020年）11月19日（木） 10時～12時

開催場所：横須賀市役所3階 301会議室

出席者：【構成員】稲葉 抄子、森 弘樹、沼崎 真奈美、小林 二三代、春山 誉夫、
磯崎 順子、小川 喜久雄、加藤 春樹、長雄 市子、佐野 美智子、
近藤 勝利、川名 理恵子、藤崎 啓造、竹内 和美

【欠席者】九鬼 貴紀

（敬称略、順不同）

【事務局】福祉部地域福祉課 田中 慎一、馬場 潤、浅羽 優貴佳、中山 ちひろ

【傍聴者】なし

1. 開会

座長の司会により開会した。

2. 傍聴者および配布資料の確認

欠席者、傍聴者の確認を行った後、配布資料を確認した。

3. 議事

(1) よこすか地域支え合い協議会 構成団体・組織紹介（資料1、2）

資料1、2に基づき、所属と名前、他の構成団体・組織と連携したいことや協力を得たいこと等を含め、自己紹介を行った。

構成員：横須賀市社会福祉協議会の地域支援担当課長を務める。社会福祉協議会は、地域福祉を推進している団体であり、地域の地区社会福祉協議会や民生委員児童委員、社会福祉推進委員と連携している。支え合いを進めていく上では、支え合い協議会に出席する団体と相互に情報共有を図ることで、できることがあればと考えている。

構成員：横須賀地区高齢者福祉施設連絡会の代表を務める。神奈川県の高齢者福祉施設協議会で、横須賀地区のブロックで活動している。所属する施設は、特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、ケアハウス、デイサービスセンター等、社会福祉法人が設置・経営している施設である。支え合い協議会に参加する他の構成団体組織とは、地域でできることを共に模索していきたい。

構成員：横須賀市立市民活動サポートセンターの館長を務める。市民活動サポートセンターは、横須賀市内の市民活動グループの支援施設である。登録している市民活動グループには市民活動サポートセンターの場所を活用していただくことや、グルー

ブや団体同士を同じ分野か否かは問わずつなぐ役割を担っている。例えば、社会福祉と児童、環境とIT等、異分野同士の団体が結びつききっかけとして、ネットワークづくりの支援を行っている。また、現在は、子育てのネットワークと子ども食堂のネットワークをつくっている。市民活動サポートセンターには、約700の団体が所属しているため、その他の分野においてもネットワークづくりが可能ではないかと考えている。一方で、市民活動サポートセンターを知らない人もいるため、活動している団体で市民活動サポートセンターに登録していない団体があれば、紹介いただき、ネットワークづくりの一助となりたい。

構成員：横須賀市居宅介護支援事業所連絡協議会の副会長を務める。居宅介護支援事業所連絡協議会は、ケアマネジャーの協議会で、約120の事業所、300人の会員がいる。地域で、現場の声を聞くことができる人材だと考えている。支え合いの地域づくりに向けて、高齢者保健福祉計画の第8期計画に関連してアンケート調査を行った。地域でどのような困りごとがあるのか、どういうものがあつたら高齢者が住みやすい地域になるのかという意見を調査した。今後、そのような情報も提供させていただき、現場の声を届けていきたい。

構成員：横須賀市通所事業所連絡協議会の代表世話人を務める。現在、市内には約150の通所事業所がある。その約半数である76事業所が通所事業所連絡協議会に所属している。通所事業所という場所を何かに活用できないかという声が年々挙がってきている印象がある。しかし、介護保険事業所という指定を受けている都合上、それ以上のことができないというのが現在の状況である。通所事業所の活用を推進していくために、行政の縦割りの部分を打破して欲しいと願っている。ある程度緩和されることがあれば、何か取り組みを始めてみたいと考える事業所が増え、相当数が見込まれるのではないかと期待している。通所事業所の種類としては、デイサービス、通所リハビリテーション、地域密着型通所介護、地域密着認知症対応型通所介護の4種類がある。地域密着認知症対応型通所介護は、地域の中にあることが前提であり、地域の人と関わりながら運営を進めていくものであるが、介護保険の制約上、地域との関わりが形骸化している状況がある。これを打破しなければ、地域の一つの社会資源として確立するのは難しいと考えるため、この支え合い協議会の中で推進していきたいと考えている。

構成員：横須賀市シルバー人材センターの副理事長を務める。シルバー人材センターには、約1,300人の高齢者が所属している。シルバー人材センターは、働きたい方と働きたい人を求めている方をつなぐ役割がある。登録者のうち、7割強の人が仕事をしている。現在、シルバー人材センターは、11の地区に分かれており、8つの委員会がある。支え合い協議会で色々な組織や団体を知ることによって、連携が可能など

ころを深めていきたい。

構成員：横須賀市連合町内会久里浜地区連合町内会の会長を務める。支え合いの根底は町内や地域であり、多様な主体が様々な形で担っているだろう。日々、町内会長の元にも色々な相談がくる。例えば、自分の敷地ではない土地の草を刈って欲しいという相談。この場合、土地が他人の私有地であるため、解決には様々な対応が必要となる。福祉に関する相談においては、相談先の調整を行ったり、その他、火事の後始末やごみの分別ができていない時の再分別等、相談の内容や対応方法は、人の暮らしに関連することであるため多岐に渡る。しかし、ごみの分別方法でさえも、周知に至らないのが地域の現状である。支え合い協議会に参加している組織や団体には、より良い方法を提示していただくことや、各事業所の利用者が困っていること等、地域における課題や現状を、個人情報抜きとして、町内会へ伝えて欲しい。地域の状況を教えていただくことで、連合町内会としては、地域の課題として取り上げ、一つ一つの地域の問題として捉えていきたい。また、地域には民生委員児童委員がいる。町内会としてはお願いし、就任していただく立場にあるが、欠員の地域もあることが現状である。民生委員も、各々が感じている地域の課題について、このような地域にしたい、このようなことをやりたいので協力して欲しいというように、町内会へ提案していただけると、より各地域の根底から支え合いが進められるのではないかと。また、介護事業所と町内会の連携という視点では、実際に八幡町内会とフィオーレ久里浜の取組がある。フィオーレ久里浜には、1年間、様々な研修会を町内向けに実施してもらった。例えば、誤嚥を防ぐ食事の方法、寝たきりの際の介護の方法等、自宅で出来る基本的なことである。毎回10名～20名ほどが参加し、参加した住民が地域の福祉の根底を支えてくれている。色々な事業所と町内会が連携し、市内の各所で細かく、そのような活動が広がれば、支え合いの活動が広がっていくのではないかと考えているため、協力していただきたい。隣近所の付き合いという視点では、ちょっとしたお茶飲みの会話から、助けてと言われてたり、高齢者の異変に気付くことがある。ひと昔前においては地域の中で当たり前のようであったつながりではあるが、コミュニケーションを深め、近所で相互に支え合うのが本来の支え合いではないか。それがあって初めて支え合いのチームになるのだと思う。地域住民のコミュニティを深めて、支え合いの心が自然と定着していくような活動を色々な形で提言していく。八幡町内会は、約1,920所帯ある地域だが、コロナ禍においては密になる集まりを避けるために、久里浜中学校の体育館を借りて、感染症対策をした上で、支え合い協議会で話したことを提言していくつもりである。一つずつ着実にやるという考え方で、如何に支え合いを進めていくかをこの支え合い協議会で参加者と論議したい。

構成員：横須賀市老人クラブ連合会（以下、「市老連」という。）の会長を務める。市内の

単位老人クラブ数は114クラブ、会員約8,000人で構成されている。活動の主な柱は身体を動かすこと、頭を使うこと、社会奉仕の活動、友愛活動である。健康な状態をフレイル状態にしないために、身体と頭を使うことが重要である。社会奉仕の活動としては地域の清掃等を行う。特に、地域の支え合いに関わることが「友愛チーム」の活動である。現在、市老連としては、友愛の立ち上げ数を増やし、ひとり暮らしの高齢者を支援する活動を進めている。なお、横須賀市には約200の老人クラブがあるが、市老連に登録しているのはそのうち114クラブである。未登録のクラブにも市老連の活動を理解していただければ、一緒に活動をしていきたい。また、老人クラブでは、身体的な機能や認知機能におけるフレイルを予防するために、色々な活動を行っている。他の組織・団体も高齢者を対象に様々な取り組みを進めていることと思うので、協賛や協働をしながら共にフレイル予防の勉強会を実施したい。

構成員：いわともしびチームでこどもサロン・茶話会の担当を務める。ともしびチームは30周年を迎え、現在32年目になる。30周年記念誌を3月に発行し、そのダイジェスト版を配布したので参照いただきたい。また、今年度の活動報告についてまとめた資料をあわせて配布している。現在、子どもサロン、子育て広場、ひとり暮らしの高齢者への支援活動を実施している。子どもに重点を置いているのは、岩戸地域の現状について、2017年から調べたところ、去年、今年と後期高齢者が一段と増えた一方、小学生や中学生の人数も少しずつ増えてきていることが分かったからである。それは町を歩いても分かることではあるが、古い空き家を壊し、新しい世代が少しずつ増えている。町内会の役員にも若い人が増えてきた。子育て世代と接することで、今は働いているかもしれないが次世代のボランティアになっていただきたい、将来地域で活躍していただきたいと思い活動をしている。生産年齢人口について、市は56.5%であるが、岩戸地域は51.7%である。対して、国の高齢人口が28.7%であるにも関わらず、岩戸地域の高齢人口は36.8%である。しかし、60代は働くことを求められている。自身も60代であるが、コロナの関係で要請があり、働くことになった。したがって70代がボランティアとして最も活躍できる世代であり、80代になると地域の茶話会に参加し介護予防に取り組むことが重要である。90代になると、自ら備え終末期に入る。70代からのボランティア活動であるため、色々な機械の導入が必要であるとともに、物忘れも生じやすい年代であるため、例えば、封入しようと思った書類が複数あった場合に、忘れてしまうことがあっても「それでよい」とする、楽しくゆるいボランティア活動を目指しながら活動を続けている。

構成員：横須賀市民生委員児童委員協議会の会長を務める。民生委員は市内584人いるが、30人前後の欠員が生じている。民生委員は、住民と行政や専門機関・団体等とのつな

ぎ役の役割を担っている。多様な情報を民生委員が知っていないと適切などころにつなぐことができないため、その点では支え合い協議会等の各組織・団体からの情報提供が重要である。情報を活かすためにも、情報を発信していただきたい。先ほど、連合町内会より、地域の課題を提言して欲しいという話があったが、民生委員としてもこれからそのように取り組んでいくことが重要であると考えているため、実現してくるのではと期待している。地域の多様な方々と結びつかないことには、情報の活用ができないと思われるため、支え合い協議会の場を貴重な機会と考えている。

構成員：横須賀市地域包括支援センター連絡会に所属し、大津地域包括支援センターの管理者を務める。市内には、12の地域包括支援センターがあるが、現在そのうち6つの地域で立ち上がっている各地域支え合い協議会については、各地域包括支援センターが事務局を担当し、自身も大津地域支え合い協議会に参加している。これから残りの地域については、順次、立ち上げが始まると聞いている。各地域支え合い協議会に参加している点を活かし、各地域支え合い協議会の実際の声を伝えていきたいと考えている。

構成員：横須賀市生涯学習センターの館長を務める。生涯学習財団が生涯学習センターの指定管理者として管理運営している。生涯学習センターは、横須賀市の生涯学習、社会教育の拠点施設である。生涯学習というのは「いつでも、誰でも、どこでも学ぶことができるという社会」の実現を目指すものである。生涯学習センターは、学びの場を提供しているとお考えいただきたい。なお、生涯学習センターで学んだことを学んだのみに留まらずに、地域等で活かしていただくことが社会教育の神髄である。生涯学習財団が、直接地域で活動できるというわけではないが、学びのグループや講師等は、登録していただいているので、地域に紹介するなど繋ぐことが可能である。また、組織や団体の地域での活動をPRする広報誌もあるので活用していただければと考えている。

構成員：第1層生活支援コーディネーターを務める。今年度4月から着任した。コロナ禍で休止していた各地域支え合い協議会が、7月から活動を再開したため、現在、各地域支え合い協議会に出席し、どのような話が進められているのかを伺っているところである。また、これから各地域支え合い協議会を立ち上げようとする新たな地域について、地域にはどのような方々がいらっしゃるのかを地域の皆様と話し合っている。地域で新しい活動が始まった等、情報があれば教えていただきたい。

構成員：横須賀市福祉部地域福祉課の課長を務める。この4月から、福祉の総合相談窓口ほっとかんとして地域福祉課ができた。8050問題等複合的な課題を抱えた方の相談窓口、一括して福祉に関する相談を受ける窓口である。伺った相談については、当課だ

けでは解決が困難であるため、市役所内の関係各課と協議を行うほか、市役所だけでなく、民生委員等の地域の方々と情報を共有しながら課題解決を図る等、調整役の役割を担っていく。各課の調整についても、縦割りではなく進めていくよう努める。昨年まで、本会議については、市役所から福祉総務課、介護保険課、健康長寿課の課長が出席していたが、構成員の発言機会が多くなるよう、出席を見送った次第である。しかし、本日、自己紹介の中でもあったように、介護保険サービスや事業所指定管理に関する事等、担当課の同席が必要な話し合いもあると思うので、その時々で柔軟に検討をさせていただきたい。

(2) 支え合い協議会が取り組む内容について（資料3）

資料3に基づき、事務局から説明した。

(3) 各地域の取り組み状況について（資料4）

資料4に基づき、事務局から説明した。

(4) 各チームでの協議テーマとメンバーについて（資料5）

資料5に基づき、事務局から、今年度は、3つのテーマごとに構成員を分け、検討していく方針であることを説明し、承認された。

(5) 各チームでの協議

事務局で選定したテーマに基づき各チームで協議を行った。

【1. 居場所づくりと地域デビュー】

(1) 場所について

① 空き家の利用

- ・ 誰でも気軽に立ち寄れるよう、「お茶飲もうよ」と声掛けできる身近なところに空き家があれば活用できないか。
- ・ 町内会館は、使いにくいところもある。
- ・ 気軽に寄れるところであれば、ちょっとした困りごと（電球交換等）を相談するかもしれない。
- ・ 「近くの空き家教えてください」と広報よこすかで募集してはどうか。
- ・ 空き家を利用するとなると、家賃や人の投入の問題が出てくると思う。
- ・ 家主の税金を控除したりはできないか。
- ・ 地域で仲が良い人を中心に運営ができないか。

② ボランティアセンターの活用

- ・ 市社協は、ボランティアセンターが地域の拠点となるよう、新たな活動を地域と検討していこうと考えている。

- ・ 開所していない時の時間を有効に活用できないものか。お茶のみの場所やシルバー人材センターの拠点の場所にもならないか。

③ 空き教室の利用

- ・ 地域包括ケアシステムの中にも学校は入っているので、学校とも関わっていききたい。
- ・ 地域コミュニティ支援課で、スクールコミュニティも市内で開始した。
- ・ なぜ、学校の空き教室が使えないのか。学校を地域が支えていくことも出来る。
- ・ 空き教室を活用することで、学校と地域の連携になる。

(2) 人材について

- ・ 地域には、多様な知識や技術を持つ人がいるため、得意な分野を活かし、地域に提供してもらいたい。
- ・ 生涯学習センターのABC講座で養成された人に協力を得るのはどうか。
- ・ 最近、「まちの保健室」という取り組みもあり、看護師が血压測定をしてくれる。地域包括支援センターにも看護職がいるので血压測定すると地域に周知したら、立ち寄る人もいるのではないか。
- ・ 男性の場合は、将棋ができますといえば、集まるのでは。
- ・ 地域の顔となる人が関わると人が集まるのでは。良いことは口コミで広がる。
- ・ 活動の中から、世話人が出てくるのではないか

【2. 町内エリアでの理解を広げる】

(1) 町内と民生委員

- ・ 町内会とは、災害時の対応も含めて、密に連携を図る必要がある。また、要援護者のこともあり、医療面でも連携の必要性を感じる。
- ・ 災害時要支援者名簿とは別に、単身者ではないが支援が必要な人をまとめた防災名簿を作っている。災害への意識が高まることは、結果として支え合いにもつながる。
- ・ 民生委員は大変だが、感じた課題をあげてもらい、町内会とともに地域全体で共有したい。
- ・ 町内会の役員会に民生委員が含まれていないこともある。また支え合いに関することは地区社会福祉協議会と整理している町内もある。町内会の温度差はあることは事実。
- ・ 地域に支援を必要としている人、支援策について一体的に話せる場が必要では。まずは、関係者が繋がる必要を感じる。

(2) 地域と介護事業所

- ・ 事業所として営利活動は当然だが、地域への取り組みを視野に入れてもらえな

いか。

- ・ 事業所が考える地域課題を提供してもらい、一緒に考える機会を作れないか。
- ・ お祭りへの協力など施設と町内の交流が広がれば相互に良い。住民の支え合いの意識啓発にもなる。
- ・ 事業所は玉石混淆。地域貢献の気持ちのあるところと関わってはどうか。
- ・ 地域密着型と認知症対応型のデイサービス場合には、地域の人に役員になってもらい運営推進会議を設置する義務がある。地域の意見を伝えられる場でもある。
- ・ 町内会、診療所、歯科医院、介護事業所の4者で地域課題を解決するグループを作った地域がある。
- ・ 事業所として、自施設外でのサービス提供は、指導監査の面から慎重になっている。地域貢献をしたいと思っても、なかなか出来ない現状がある。
- ・ 町内だけでなく、事業所からの客観的な指摘、提案で町内の意識が変わってくる可能性がある。既存の協力から、新たな協力の形ができると良い。

【3. 新たな取り組みの発見】

(1) 移動および買い物支援

- ・ 新しい取り組みと一概にいうと、内容も多岐にわたるため、初めに移動や買い物の支援に絞って協議を進める。
- ・ 移動支援の取り組みを進める上で重要な点は、町内エリアの理解、行政の後押し、民間企業の協力が不可欠である。それぞれが手を組める環境があって初めて実現するものだが、どのように手を組むとお互いにとって進めやすく、かつ、高齢者が日々の暮らしに生きがいや楽しさを持てるかが重要である。
- ・ 地域の多様な人が手を組む必要性について久里浜を例にあげる。病院が新たに建設、警察所が浦賀から移転される地域であるため移動を求める人が増えることが予想される。しかし、例えば、バスを走らせるにしても移動のための手段として考えるのではなく、行った先に商店街があって買い物をすることで商店街が潤い、利用する高齢者にとっては、外出できる楽しみにつながるという視点が重要である。バスを循環させるには、事業者の理解が不可欠であるが、バスが回っていく先で多様な人が多目的に利用でき、乗ってみようと思えるものでなければ継続性に課題が生じるだろう。
- ・ 一定額以上を購入することで自宅への配送を請け負うサービスがあるスーパーがある。身体能力が低下しても、気兼ねなく買い物ができる安心感がないと、買い物に行けない等の課題が出てくると思う。課題を俯瞰して捉えることが重要である。
- ・ 週末空いているガレージで販売をしている地域もあるという情報があった。買い物支援については、地域の特性に応じて複数の課題や解決方法があるのではないか。
- ・ ヒューマンでは、施設の送迎車両を使用していない時間帯を活用して、試行的に買い物支援の取り組みを行っている。町内会から2,000円の負担金をいただき、月に1度、

町内会を回っている。

- ・ ヒューマンの取り組みを好事例として市内に横展開することができないか。例えば、総合福祉会館に本町老人デイサービスセンターには、車両が2台あるが、昼間空いているとしたら、例えば地域の集いの場に停まるようになると、高齢者が地域の友人へも会うことができるといった多目的な展開ができると生きがいにつながる。
- ・ ボランティアが自家用車で買い物支援を実施しようとする、事故が起きた時の責任等、地域のボランティアの負担がある。追浜のはまちゃんバスのように、タクシー事業者に委託し継続している事例のように、共通するのは、多様なネットワークが重要だということだ。
- ・ 重要な点は、物が手に入ればよいわけではなく、高齢者の生きがいをどう守るかという点である。商品を見る楽しさ、旬の物を衝動買いする楽しさ、友人と何を買ったか言い合う楽しさ、小規模のスーパーでは購入できないものを、より大きなスーパーで購入したいといった、暮らしの中での生きがいや楽しさをどうしたら実現できるかという支援が重要である。
- ・ 買い物支援については、市役所の関係各課に現状の確認をする必要がある。

(2) その他

- ・ 集いの場について、お寺や神社、教会を活用はどうか。ある地域では、ジャズなどの催し物を開催しているところがある。お寺は寺子屋の文化が根付いているため、実は、地域の人が集まる多様な取り組みが行われている可能性がある。調査することも必要である。

4. 各構成員からの情報提供

生涯学習センター

「まなびかんニュース」10月号、11月号

- ・ 各種グループの活動案内などを掲載している。各組織や団体に所属しているグループで掲載の希望があれば、掲載可能である。
- ・ よこすかまなび情報は、サークル活動をしているグループと講師活動をしている人の情報である。地域で求めがあれば紹介することが可能である。基本的には、有償の活動であることが多いが、中には地域のボランティアとして活動してもよいという人がいるので、相談していただきたい。

5. 閉会

次回会議の日程は、令和3年2月頃を目安に再度調整することとし、座長の挨拶により閉会した。

※この議事録は委員等の発言の要点筆記である。